アメリカ合衆国における日本文化論の形成に関する一考察

―― コロンビア大学における 2 つの源流の形成を中心に ――

小野澤　正　喜[1)]

The Formation of the Two Traditions of the Japanese Cultural Studies in the U.S.A.:

Focusing on the contribution of Ryusaku Tsunoda and Ruth Benedict

Masaki Onozawa

Abstract

In 1930s-40s, two great traditions of Japanese Cultural Studies were established in the U.S.A., both of which were taken place in the campus of Colombia University. The first one was the literacy-oriented tradition, which produced many scholars in Japanese literature, history etc. This tradition was led by a Japanese scholar, Ryusaku Tsunoda. Another tradition was established by the Columbia school of anthropologists which was organized and led by Franz Boas. One wing of scholars of them established “Culture and Personality school” influenced by the psychological theory of Sigmund Freud. In the tight political situation in 1940s, the majority of those scholars initiated the studies of “National Characters” which were linked with the military purposes. The outstanding monument of this school was the publication of “Chrysanthemum and the Sword“ by Ruth Benedict in 1946.

It is discussed in this paper, the co-existence and the absence of mutual interaction of the above-mentioned two traditions of Japanese studies in Columbia University.

Key words: Ryusaku Tsunoda, Donald Keen, Ruth Benedict, “Chrysanthemum and the Sword”, National Character Studies

キーワード：角田柳作，D. キーン，R. ベネディクト，『菊と刀』，国民性研究

Ⅰ　まえがき

20 世紀初頭までアメリカ社会において、アジアの新興国日本は謎に満ちた国であった。その中で日本社会・日本文化に関する理解の手がかりを与えたのはアメリカ留学を経験した日本人研究者による著作であった。新渡戸稲造の『武士道』（1900）や岡倉天心の『茶の本』（1906）は、東洋的な思想伝統と関連付けた日本文化理解を促す第 1 段階の成果であった。それからわずか 30–40 年を経てアメリカ人による本格的な日本文化論の成果が生み出された。J. エンブリー（J.Embree；1908–1950）の『須恵村』（1939）、D. キーン（D.Keene；1922–2019）の『日本人の西洋発見』（1952）等は、そうした第 2 段階の成果であった。これらはアメリカ人の視角からする異文化理解の要素を加味しているとはいえ、第 1 段階の成果との強い継承性が見られる。そうした発展過程にお

1）育英短期大学現代コミュニケーション学科

いて、コロンビア大学の日本文献コレクションを設立し、日本研究者育成に尽力した角田柳作については特筆されるべきものがある。

一方、20 世紀初頭アメリカ文化人類学の再編と発展において中心的な役割を果たしたのは F. ボアズ（F.Boas；1858−1942）であったが、彼はコロンビア大学人類学部を拠点にした学会活動を展開した。その一角に形成された「文化とパーソナリティ論」研究者集団の中心的存在であった R. ベネディクト（R.Benedict；1887−1948）は日米戦争の緊張した状況下で「敵性国家日本」に関する調査研究を進め、戦後『菊と刀』（1946）という日本研究史上の金字塔を打ち立てている。

本稿ではコロンビア大学のキャンパスを起点に形成された文献学的日本研究と文化人類学的日本研究という 2 つの日本文化研究の源流に関する検討を進めていく。

Ⅱ　アメリカ合衆国における日本研究成立前史

1．欧米文化の摂取から日本文化のアイデンティティの確立・対外アピールへ

日米間の文化交流の端緒はペリー来航によって開始された幕末維新の外交交渉に遡る。

近代科学と武力において日米間に大きな隔たりがあることを認識した日本の国家権力（幕末の徳川幕府と明治以降の維新政府）はいずれも欧米の近代科学技術の摂取を志向し、多くの使節団（1871−73 年の岩倉使節団等）の派遣、留学生の送出に努めた。明治初年の「文明開化」、「殖産興業」の標語にはそうしたスタンスが反映していた。その一方「和魂洋才」の標語を併せて唱えることによって、日本人としての主体性を確保しようとする両義的なスタンスが存在した。

欧米からの科学技術の導入に合わせて、人文社会科学の知識体系や哲学思想・宗教面での旺盛な摂取が見られた。明治初年の翻訳・翻案ものの流布の後、明治 10 年代以後、日本社会は欧米から導入したもののうち日本社会や日本文化に適合するものを選択的に吸収し、日本的なものとして統合する方向を辿る。西欧的なものを日本社会に付加しつつ、伝統的なシステムを活性化させようとする内在化の段階に至ったということができる。

そうした内在化に関して決定的な役割を果たしたのは明治初年から開始された日本の近代教育制度の確立であった。初等・中等教育については 1872 年の「学制発布」以降市町村単位で整備が進んだ。更に 1877 年の東京大学の設置以後、高等教育の整備が進められた。こうした日本の高等教育確立において外国人教員の貢献が大であった。

教育分野における整備拡充と相俟って、キリスト教の普及と日本社会への定着が進んでいった。熊本において幕末の洋学の伝統と結びついて形成されたキリスト教徒集団は熊本バンドと呼ばれ、日本の近代思想史において重要な役割を果たした。また北海道農学校（後の北海道帝国大学）において形成されたキリスト教集団は「札幌バンド」と称されたが、内村鑑三、新渡戸稲造等近代日本の思想を牽引する思想家を輩出した。

こうした欧米の文化・科学技術の受入れが内在化の段階に到達する中で、「外から見た日本社会・日本文化」に関する意識が芽生え、その方向での成果がみられるようになっていった。

2．日本文化の再認識と対外発信

明治初年に確立した高等教育制度において学び、留学の機会を与えられた人々は、外国生活への不適応等の挫折経験や思想的再編を経て、日本文化に関する新たなアイデンティを確立していった。文学分野における夏目漱石、森鴎外、永井荷風等の著作においてそれを辿ることができる。また宗教分野における新島襄、内村鑑三等の宗教遍歴の記録によっても裏付けることができる。

こうした趨勢を基礎に、明治後半期になると日

本文化、日本社会を相対化し、彼我の遠近法の中で捉え返して日本文化を対外的に発信していこうとする動きが出てきた。英語の著作を通じて欧米人に日本文化の精髄の理解を求めるという動きである。ここでは岡倉天心、新渡戸稲造の例により日本文化の対外発信の努力を見ていこう。

2–1　新渡戸稲造

1862 年に岩手県盛岡藩の士族の家に生まれた新渡戸稲造は上京して英語学校に入学するが、農学を志し札幌農学校に入学する。そこでW.クラーク（W.S.Clark；1826–86）が残したキリスト教活動に同期の内村鑑三らと共に参加・入信している。北海道庁の勤務を経てアメリカ留学を志し、ジョンズ・ホプキンス大学、ドイツのハレ大学等で留学生活を送り、学位を取得している。その後札幌農学校、京都帝国大学、東京帝国大学教授等を務め、1906 年から 7 年間は第一高等学校において校長として職務を果たしている。アメリカ滞在中の 1900 年に英文で『武士道』*1 を出版している。この著書は日本人の道徳体系の中核に歴史的に形成された「武士道精神」があるとし、その成立過程を論じ、「義」「仁」「忠」等の体系について外国人に分かる形で説明している。1905 年の日露戦争における日本の勝利で国際的に日本に対する関心が高まる中で大きな反響を呼び、ドイツ語版、フランス語版等が刊行されている。なお 1920 年に国際連盟が結成される中で新渡戸は事務次長の 1 人に選ばれ 7 年間在任している。

2–2　岡倉天心

1863 年に福井県福井藩の士族の家に生まれた岡倉天心は父の勤務地の横浜で英語を習得した。1875 年に設立されたばかりの東京帝国大学文学部に入学し、1880 年に卒業している。文部省に勤務し外国人教師E.F.フェノロサ（E.A.Fenollosa; 1853–1908）と共に日本美術の調査に当たったことをきっかけに美術分野の専門家、組織者の道を歩んでいく。1890 年東京美術学校（後の東京芸術大学美術学部）を設立し初代校長に就任している。1898 年には日本美術院を設立している。また 1904 年にはボストン美術館中国・日本美術部の責任者として招聘されている。そうした国際的な美術分野の活動を展開する中で 1906 年に執筆されニューヨークの出版社から刊行された書が『茶の本』*2 である。この著書で岡倉は日本の茶道を日本文化の精髄であるとして論じている。茶道の作法、茶室の構造等が日本人の美意識を集約するものとして形成されてきたと説明されている。また禅仏教と道教の伝統が日本に定着する中で茶道の中に統合されていったことが論じられている。この書は 1905 年の日露戦争における日本の勝利で日本に対する関心が高まったことと相俟って、新渡戸稲造の『武士道』と共に大きな関心を集めた。

Ⅲ　コロンビア大学における日本研究センターの設立と日本学の発展

第 2 章において日本人の国際活動の認知、日本人が英語で出版した日本紹介文献等により、日本文化や日本社会に関する情報の発信が 20 世紀の初頭に進められたことを確認した。しかしそれによって日本に関する情報が欧米社会によって受容されたとはいえ、欧米側から見て日本社会が本格的な研究対象になったとは言えない。1920 年前後まではアメリカにおける日本に対する認識は極めて低く、アメリカの大学・研究機関における日本研究は中国研究やアジア研究に付随した形か、美術史等の特定領域に特化したもの（例：ジャポニズム研究）でしかなかった。その状況下で 1929 年のコロンビア大学の日本文化研究所創設に尽力し、人文科学分野の日本研究者の育成を進めた角田柳作の貢献は特筆に値する。

コロンビア大学等におけるアメリカ人「日本学研究者」の育成と日本学に関わるコレクションの

積み上げによって、それまで日本側からの一方向的な情報発信でしかなかった状況が打破され、日本学がアメリカ社会に内在化する契機が与えられたということができる。本章では角田がアメリカの日本学確立に対してなした貢献と、彼の影響下で日本研究者として育っていった人々を中心に論じたい。

１．角田柳作の「日本学研究」への貢献

1–1　角田柳作の辿った道とコロンビア大学日本文化研究所[*3]

角田柳作は 1877 年（明治 10 年）に群馬県の農家に生まれた。前橋中学を経て東京専門学校（現在の早稲田大学）文学科に入学・卒業している。卒業後、民友社、人民新聞社、開拓社等の出版・報道関係の業務に 3 年間携わった後、教育関係の職に転じている。京都の真言宗聯合高等中等学林という宗教法人の学校において 3 年間教師を務めている。その後福島県立福島中学校（現在の福島高校）、宮城県立仙台第一中学校（現在の仙台第一高校）において 6 年間教師を務めている。1909 年に浄土真宗西本願寺派教団の依頼を受けてハワイ、ホノルル市の本願寺ハワイ中学校の校長として着任している。1917 年アメリカの大学での勉学を志し、1 年間コロンビア大学等で学んでいる。1918 年コロラド州デンバー市のコロラド日本人会の書記長に就き 2 年間在職している。1920 年にニューヨーク市のニューヨーク日本人会書記長に転任し 6 年間在職している。アメリカに「日本文化学会」を設立しようとする機運の高まりの中で、角田は日本に帰国し各方面で支援者の確保に努め、岩崎小弥太等の財界人への働き掛けも行っている。また日本研究関連の図書・資料の寄贈の呼びかけも行っている。こうした動きが奏功し、1929 年にコロンビア大学内に「アメリカ日本文化研究所」が設立され、角田は研究所理事兼司書に就任している。1929–30 年に角田は再び日本に帰国し研究所支援の募金活動を行う一方日本研究図書・資料寄贈の働き掛けを行っている。こうした努力の結果、1931 年にコロンビア大学は日本文化研究所図書館の蔵書を大学図書館の「日本文庫」というコレクションとして引き継ぐことになった。角田は日本文庫主事として日本語コレクションに責任を持つと共に、大学の日本学研究所講師になった。日本学関係の組織設立と日本研究資料収集に注力してきた角田はここで初めてアメリカの大学における日本学研究者の養成に関わることになった。

その後角田は 1953 年にコロンビア大学を退職するまで 22 年間にわたり日本研究分野の教育を担当した[*4]。　講義で扱われるテーマは詩歌を含む文学、歴史学、哲学思想等人文科学の多くの領域をカバーしていた。また時代的にも古代から現代までの万般にわたる教育を行った。日本語のネイティブであるとはいえこれだけ広範な領域についての教育をこなしたのは東京専門学校までの学歴と旧制中学校や日本人学校の教員としての教職歴の中で培われた実力もさることながら、それぞれの学期の授業に対する周到な準備を行った研鑽によって大学レベルの研究指導の質が確保されたものと思われる。

ドナルド・キーン等教え子の回想録によっても角田はコロンビア大学関係者に「センセイ、センセイ」と慕われ、大学院の博士論文作成等でも高水準の指導を行っていたとされている。そうした研究教育上の功績が評価され、角田は 1962 年にコロンビア大学から名誉文学博士号を授与されている。

上述のように角田は戦前、戦中、戦後と 1964 年に他界するまで 33 年間にわたってアメリカ人による「日本文化研究」を支え、日本研究者育成に努め続けた。アメリカの「日本文化研究」の源流の一つと見なされている所以である。更に重要なことは 1930–40 年代に日米間の緊張が高まり 1941 年 12 月の日米開戦に至るまでの 10 年余りの戦前の期間においても、角田は真摯に学生・大

学院生の指導に当たり、少なからざる日本研究者の確立を支えていたことである*5。

1-2　角田柳作の影響を受けたアメリカ人日本研究者

角田はコロンビア大学において「日本思想史」を主たる担当科目としながらも文学、歴史等広い分野の教育を行った。彼の支援を受け日本研究者として確立した人は、①コロンビア大学に学籍を持ち、コロンビア大の学位を取得した人と、②他大学での学歴を有し、学位もコロンビア大以外から取得した人に大別されるが本節では①の代表格としてD. キーン、E.G. サイデンスティッカー（E.G.Seidensticker；1921−2007）を②の代表格としてE.H. ノーマン（E.H.Norman；1909−1957）とエンブリーを例示したいと思う。

1）D. キーン

1938年にコロンビア大学文学部に入学し、1940年に角田の「日本思想史」を受講することを通して角田を師と仰ぐ関係が開始された。1941年末の日米開戦により大学が非常態勢に入る中でキーンは1942年にアメリカ海軍日本語学校に入学し日本語の習得に努めている。戦時中日本語能力をもつ将官として基地や戦場での任務に就くが、最終盤で沖縄戦に従軍し、日本人捕虜の通訳を務めている。戦後コロンビア大学に復学し大学院に進学している。修士課程では角田の指導の下で江戸時代末期の思想家本田利明に関する論文を作成し1947年に修士号を取得している。更に博士課程では「国姓爺合戦」に関する論文を作成し1951年にコロンビア大学から博士号を取得している。その後京都大学への留学を経て、1955年にコロンビア大学助教授に就任し、1960年に教授に昇格している。

日本文学を専攻したキーンの場合、紆余曲折はありながらも一貫して角田の指導を受けて研究者になった。アメリカ人でありながら日本語に通じ、日本文学を研究するパイオニア的研究者として確立していった。後に日本文化研究の業績が評価され文化功労者、文化勲章等の形で日本における顕彰を受けている。最晩年の2017年には日本に帰化している。

2）E. G. サイデンスティッカー

コロラド大学に経済学専攻で入学したが、入学後英文学に専攻の変更をしている。日米開戦に伴い海軍日本語学校で日本語を学び海兵隊語学将校として従軍している。軍では没収した日本軍の文献資料の解読の任に当たった。戦後は占領政策に関わる任務に当たり、1946年にアメリカに帰国している。帰国後コロンビア大学大学院に入学し法学の修士号を取得している。この期間に角田の指導を受けたと思われる。1947年国務省外交局に入省し、1948年再来日し連合軍最高司令長官付職員として日本占領政策に関わる任務に当たった。1950年に退官し、5年間東京大学に学籍を置いて日本文学研究を進めている。卒業後も日本に留まり、大学教員をしつつ日本文学の翻訳等に当たった。1962年アメリカ帰国後、スタンフォード大学、ミシガン大学、コロンビア大学等の教員を務め、後進の日本学研究者の育成に当たった。谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫等の作品の翻訳を多く手掛け、日本文学の国際化に貢献した。また源氏物語の英訳も行っている。

3）E. H. ノーマン

カナダ人宣教師の息子として軽井沢で出生している。トロント大学、ケンブリッジ大学を経てハーバード大学大学院で日本史を専攻し、E.O. ライシャワー（E.O.Reishauer；1910−1990）の指導の下で博士論文の作成を行った。後に刊行された博士論文『日本における近代国家の成立』の序文では、角田による訂正とコメントに負っていることを明記しており、大学の枠を超えて角田が日本研究に関する研究指導活動を行っていたことを示している。1938年にハーバード大を卒業後カナダ外務省に勤務し、第2次大戦後カナダ外務省から連合軍司令本部（GHQ）に派遣され、マッカー

サー元帥の通訳を担当した。連合軍による日本占領政策において重要な役割を果たしている。1951年以後はカナダ外務省に戻り、ニュージーランド、エジプト勤務等を歴任し、スエズ動乱への対応等で高い評価を受けた。アメリカのレッド・パージの追及が強まる中で1957年48歳で自死している。

4）J. エンブリー

ハワイ大学、トロント大学を経てシカゴ大学大学院に進学し文化人類学を専攻した。当時、シカゴ大学にはイギリス社会人類学の中心的な指導者A.R. ラドクリフ＝ブラウン（A.R.Radcliffe-Brown；1881-1955）が着任し、大学院における指導を担当していた。その結果社会の構造機能分析を中心的に進める点で、文化の分析を中心課題としてきたアメリカ文化人類学の学界内では特異な「シカゴ学派」が形成されていた。博士論文作成のための調査準備をしていたエンブリーにこうした面での影響が及んでいたと考えられる。彼は日本における現地調査を計画し、1935-36年に熊本県球磨郡須恵村で1年余りの定着調査を行い、“Suye Mura：A Japanese Village”という博士論文を完成させ博士の学位を取得している。この論文は1939年にシカゴ大学出版会より刊行されている。角田はエンブリーの日本調査の支援を行ったとされている。熊本地域に関する歴史学や社会科学分野の文献参照の面での助力や入国や調査許可取得などで角田の人的ネットワークが支えになった面があると思われる。エンブリーは調査に先立って日本民俗学の柳田国男、農村社会学の鈴木栄太郎等に接している[*6]。

エンブリーの須恵村論文については、後にR. ベネディクトが『菊と刀』を執筆するにあたっても参照しており、戦前に日本で行われた唯一の文化人類学的調査の記録としての意味を持っていた。

ところでベネディクトが『菊と刀』に先立って執筆した未刊行論文「タイの文化と行動様式」（1943年9月執筆）の中では、日本的な強固な集団主義志向ではなく、またアメリカ人的な個人主義的行動様式でもない類型としてのタイ人の行動様式が論じられている。この論点は後にエンブリーによってタイ研究の指針的な仮説に仕立て上げられていった[*7]。

Ⅳ　戦時研究としての「国民性研究」と『菊と刀』

第3章まででコロンビア大学において1930年までに日本学研究センターが大学図書館附属施設として形成されたことを確認した。ところが1920年代に同じコロンビア大学構内において別の形態の日本研究を生み出す研究分野が形成されていた。それは後のベネディクトの『菊と刀』という形の日本研究の形成につながる文化人類学部の確立であった。本章ではコロンビア大学における文化人類学部の発展と学説の展開について検討を進めていこう。

1．文化人類学上の「文化とパーソナリティ論」の展開と国民性研究

1-1　コロンビア大学文化人類学部とF. ボアズ

「近代アメリカ人類学の父」と称されるF. ボアズ[*8]が1899年にコロンビア大学人類学教授になった時点からアメリカ人類学は「文化の学」としての文化人類学に向かって急展開を遂げていった。アメリカにおいても19世紀後半以後、L. H. モーガン（L.H.Morgan，1818-1881）に代表される進化論の学説が一世を風靡していた。しかし19世紀末以後に、母系制の父系制に対する先行仮説や、普遍的斉一的進化の仮説の信憑性に疑義が提出される中で、アメリカの人類学研究は調査研究のあり方、資料の分析法等に関して方向性を失って低迷していた。そうした中でボアズは「厳密に定義された小さな地理学的領域内で生起する文化的現象を研究する方法」を提起しつつアメリカ人類学を文化研究の方向に誘導した。それは同

時に「それぞれの集団には文化的に固有の統合の様式があり、その多様性を比較検討することが文化人類学の研究法でなければならない」という主張と直結し、個々の文化集団の多様性を認める「文化的相対主義」の提唱に結び付くものであった。

ボアズは1858年にドイツで生まれ、大学教育で最初に取得した博士号はキール大学からの物理学の学位であった。その後地理学に転じ、更にアメリカ大陸のイヌイット（エスキモー）の調査を進める中で人類学に転じた。この経歴が示すように、彼の「文化的相対主義」の主張は現地調査の中から編み出されたものと言える。ボアズはコロンビア大学人類学部の大学院教育の体制を整備し、多くの研究者を全米の諸大学に送り出すことを通じて、アメリカ人類学の再編を主導した。

ボアズの説く「文化的多様性」「文化的相対主義」の主張は多義的であったためボアズの弟子たちは理論化において独自の仮説や図式を考案しつつ文化集団の実証的研究を進めた。その結果A.L. クローバー（A.L.Kroeber；1876−1960）の文化超有機体説、C. ウィスラー（C.Wissler；1870−1947）の文化領域説等、ボアズの弟子たちによる文化の研究の方法と理論化は多様な形で展開された。

1−2　コロンビア大学と「文化とパーソナリティ論」の展開

1920年代以後、ボアズの進めた文化に関する研究法を〈文化と個人の心理・性格〉や〈文化と集団的気質・国民性〉研究の方向に展開した有力な学派がコロンビア大学を中心に成立した。「文化とパーソナリティ論（Culture and Personality）」学派と称される研究者集団である。そのグループに共通する特徴としては当時アメリカで急速に影響力を強めていたフロイト心理学の仮説を何らかの形で摂取し前提に置いていることである。G. フロイト（G.Freud；1856−1939）は深層心理に関する仮説群を提示し、原始的自我（イド）とリビドー（性衝動のエネルギー）や幼児性欲等にかかわる精神分析の方法を提唱していたが、その仮説群を何らかの形で研究方法論に組み込んでいた「文化とパーソナリティ論」学派においては調査対象集団における育児様式や思春期までのしつけの体系と個人及び集団的性格形成の関係を重視するという共通点が見られた。この学派自体は、流動的な研究者集団であり、時間の経過の中で方法論においても大きな変化を見せている。ここでは箕浦康子[*9]の下記の段階区分を援用しつつ、論を進めていくことにする。

① 個人―文化の関係への関心の段階
② 精神分析学の影響の段階
③ 心理学的手法と統計学の導入の段階
④ 国民性研究の段階
⑤ 心理人類学成立の段階

①の段階を代表する研究者はR. ベネディクトやM. ミード（M.Mead；1901−1978）等である。ベネディクトはアメリカ・インディアン社会の調査を踏まえて、個別の部族社会の文化がそれぞれ固有の様式ないしは型（pattern）をもっていることを『文化の型』（1934年）において展開している。文化に内在する駆動力やライトモチーフが構成員の行動を衝き動かしてアポロン型やディオニソス型等の文化の型を形成させるという。それに対してミードは太平洋諸島における現地調査を踏まえて個人のパーソナリティ形成に及ぼす文化的要因の多様性について、従来の定説を覆す多くの新知見を報告し、『サモアの思春期』（1930年）や『三つの未開社会における性と気質』（1935年）等の著作を刊行している。

②1937年にコロンビア大学人類学部長の職をボアズから引き継いだR. リントン（R.Linton；1883−1953）はニューヨーク精神分析研究所のA. カーディナー（A.Kardiner；1891−1981）の協力を得てフロイト理論を全面的に取り込んだ理論的枠組を考案し、民族誌資料の解釈や分析の体系化

を提唱した。その概念枠組によれば､授乳や離乳、排便の訓練、性的しつけ、家族制度のあり方等は第一次制度とされ、それによって基本的パーソナリティ構造（basic personality structure）が形成されるとしている。そして基本的パーソナリティ構造を共有する人々が生活の中で投影したものが宗教、神話、芸術等の二次的制度であるとしている。

③②の仮説群を実地調査で検証する手法として心理学の検査法を援用することがデュボア（C.DuBois；1903−1991）等によって提唱された。心理学的検査（ロールシャッハ検査、主題統覚検査（TAT）、言語連想検査、迷路検査等）を調査対象集団に対して行い、調査結果の統計学的分析を進めることによって、民族誌データを補完しようとするものである。対象集団の中で最も頻度の高いパーソナリティ・タイプが最頻的パーソナリティ（modal personality）とされ重視された。この手法を用いることによって心理学的、統計学的な厳密さを獲得したが、民族誌的調査本来の「発見的効果」が失われたとの批判を受けている。

④1930年代後半以後の第二次世界大戦前夜のアメリカでは軍学共同研究への傾斜が見られた。とりわけ文化人類学研究者に敵性集団の特性分析等の課題が突き付けられた。連邦政府及び軍部からの要請に応えた研究が求められ、当時全米で500人程度存在した文化人類学研究者の9割以上が何らかの軍学共同研究に携わったとされている。特に「自民族、同盟国、敵国の国民性」の研究は軍事的戦略立案にとって不可欠であるとして大型のプロジェクトが組織された。文化人類学に留まらず歴史学、社会学、政治学、心理学等の研究者が動員され学際的「国民性研究プロジェクト」が組織された。その中で、アメリカ人、ロシア人、日本人、ドイツ人、イタリア人、インド人等に関する実証研究が進められた。その研究成果は直ちに軍事報告書として軍部に提出され、戦略戦術や占領政策の基礎資料とされた。

こうした中で従来小規模な同質的社会における長期の参与観察や面接調査を主たる調査手法としてきた文化人類学者たちは、近代国家の中の大規模で異質集団を内包する対象集団の調査研究に対応せざるをえなくなった。更に「敵性国家の国民」である場合には現地での滞在や参与観察調査は許されない。こうした調査対象に対しては「遠距離文化調査」の手法を考案しつつ取り組まなければならなかった。こうした調査の1つがベネディクトが取り組んだ日本国民に関する研究で、戦後になりベネディクトはその成果を一般向けの著書として刊行することとなった。

こうした「国民性研究」の手法は第2次大戦終結後も、新たに生じた冷戦体制の中で重視されることになった。冷戦体制下では「敵性集団」はロシア人や東欧系国民とされ、そうした方向の調査研究プロジェクトが組織されていった。

⑤1960年代になると「文化とパーソナリティ論」学派の文化人類学界内における影響力も低下し、「国民性研究」に関しては調査法、検証可能性等の諸問題および軍学共同に関する批判が浴びせられる中で後景に退いていった。その中で「パーソナリティ」という不変の実体であるかの含意をもつ用語を避けて、個人と社会・文化の可変的で継続的な過程の研究を目標とすべきであるとして、分野名を「文化とパーソナリティ」から「心理人類学」という文化人類学の下位分野とする提案がF.L.K.シュー（F.L.K.Hsu；1909−1999）等からなされた。学派名､学会名を「心理人類学」と変えた形で現在に至っている。

上記のような長期にわたる文化人類学上の「文化とパーソナリティ論」学派の歴史の中で本論に関わるのはベネディクトに関連する①の段階と④の段階である。アメリカ・インディアン研究から出発しながら、戦時下で日本を対象にした「国民性研究」を進めたベネディクトの作品『菊と刀』が「日本研究」の重要な源流としての地位を確立していった経緯について次節で論じていこう。

2．R. ベネディクトの「菊と刀」

1941 年の日米開戦以後、文化人類学研究者に対して連邦政府及び軍部から国民性研究等の要請がなされるようになった。コロンビア大学の文化人類学者、M. ミード、R. ベネディクト、J. ゴーラー（J.Gorer；1905−1985）等は通文化関係協議会を結成して文化人類学研究者にとって国民性という新たな課題に対処するための遠距離文化の研究法の検討を進めた。戦局の拡大の中で彼らの多くはワシントンの戦時情報局のスタッフとして採用されていった。ベネディクトも 1943 年 6 月より戦時情報局のスタッフとして各国の国民性研究を進め、軍当局に対し報告書を提出した。まずルーマニアの国民性研究から始め、タイ、ドイツ、オランダ、ベルギー、ポーランド等を対象とした研究を行っている。研究実績の評価が高まる中で 1944 年 6 月にベネディクトに課されたのが敵性国家日本の分析であった。

日本語学習経験もなく、日本への渡航経験もなかったベネディクトが調査研究で依拠できた手掛かりは下記のようなものだけであった。

① 戦時情報局の先任者たちが作成した日本人の国民性に関する報告書
② 軍当局が収集した日本の新聞、小説、刊行物の英訳
③ 軍当局が収集した映像資料（日本の映画、映像ニュース等の動画類）
④ 強制収容所で生活する日系一世、二世達とのインタビュー

①に関して言えばベネディクトの先任者ゴーラーの報告書はレベルの高いものであった*[10]。それは日本滞在経験をもつ宣教師等のアメリカ人に対するインタビュー記録と文献資料の検討結果を踏まえて作成された報告書であった。

②に関して言えば漱石の作品等の小説や古典の英訳が当時相当量蓄積されていた。新聞や刊行物についても戦時情報局の担当部署や調査助手が随時英訳を行っていた。更に英文で刊行されていた『武士道』と『茶の本』では日本人の道徳倫理体系の真髄についてレベルの高い仮説群が展開されていた。

③日本政府が国威発揚のために作成したキャンペーン映像や映像ニュース等を軍部が入手しコレクションにしていた。また歌舞伎や能などの伝統芸能の映像も利用できる状態になっていた。ベネディクトはこれらの映像資料についても通訳の補助を受けつつ吟味することができた。

④上記の補助的資料を援用しつつも文化人類学者ベネディクトが最も重視したのは在米の日系人や日本人捕虜たちであった。通訳のロバート・ハシマ（Robert Hashima）を介したインタビューではあったが経験を積んだベネディクトにとっては生身の日本人・日系人から情報を得る機会となった。また面接の中で被調査者の素振り、表情から内面的心理を観察する場ともなっていた。

1970 年代以後の文化人類学的エスニック研究における日系人の調査研究では 1 世—2 世—3 世の世代間で見られるアメリカ社会への適応・同化の差異に着目した分析が中心になったが*[11]、ベネディクトの場合「日本生まれの日本人・日系人」としての 1 世世代が調査の主たる対象とされた。在米日系人の多くは西南日本の農村部より明治末年（1890 年代）以後に渡米しており、英語の習熟度は低く、アメリカ社会への適応も不十分という共通的特徴を持っており、出国後の帰国経験もない者が多かった。こうした事情からベネディクトの調査対象者たちは、時間的バイアス（昭和初年以前の出生者）、地域的バイアス（首都圏等の都市部出身者ではなく西南日本の農村部出身者）を有しており、それがベネディクトの分析結果に反映したことが想定できる*[12]。更に池上、佐藤（2021）によれば、ベネディクトの調査に対して日系人の多くが非協力的で、調査に応じた者の多くは思想的に左翼系であり、彼らは日本社会の状況に関して「封建遺制の残存」を強調する傾向が

あったという*13。

上記のような制約がありながらも、面接調査という人類学的調査手法が可能となった条件の中でベネディクトは日本人の行動パターンの特性に関する調査研究を進め、日本人の国民性に関する戦時報告書「日本人の行動パターン」を3カ月という短期間で作成・提出している。彼女はこの戦時報告書を基礎に戦後1946年約1年をかけて補充の調査研究を進め、その成果を織り込んだ形で『菊と刀』を完成させ刊行している。

『菊と刀』は13章立ての大部な刊行物であるが、その中で伝統的日本社会の「徳」、「義理」、「恩」、「人情」、「修養」等の道徳倫理の体系が詳細に論じられており、先行研究の1つである新渡戸稲造の『武士道』の仮説群を深めるものになっている。同時に日本の共同体におけるウチ（内、家）とソト（外）の峻別、集団主義、形式主義と「甘え」の共存等の分析視角は英文で1939年に刊行されていたエンブリーの『須恵村』の記述を参照したものと思われる。その際、ベネディクトが面接調査対象とした日系1世たちが西南日本の農村出身者であったことからして、「日本の士族の倫理体系」を集約した『武士道』の分析結果は面接対象者の反応とは相当の乖離があったと考えられる。日系人の面接調査において有用な手掛かりを与えたのは直近の時期に熊本県の農村で収集されたエンブリーの『須恵村』の情報ではなかったかと推測される。

『菊と刀』において日本社会の特徴点として「恥の文化」と「集団主義的（共同体的）行動様式」の2つを提起しており、それはその後の日本研究で主要なテーマとなっている。

1）日本文化および日本人の行動様式の分析枠組みとして、日本対アメリカ（含欧州）の対抗軸を設定している。集団主義的な日本人の行動パターンを「恥の文化」（共同体的秩序順守志向）に淵源すると規定し、個人主義的なアメリカ人の行動パターンを「罪の文化」（ピューリタン的な神の命令に従う個人主義的志向）に淵源するとしてシャープな対照関係にあると論じている。この仮説はその後の多くの「日本人論」のプロトタイプになっている。例えば土居健郎は「恥の文化論」の延長上に「甘えの構造論」を展開している。またイザヤ・ベンダソン（山本七郎）は「罪の文化論」の延長上で『ユダヤ人と日本人』等の著作を積み上げている。

2）日本人の集団主義的（共同体的）行動様式については、農耕社会としての長期の歴史要因等を挙げると共に、アメリカ文化人類学の「文化とパーソナリティ論」学派が重視する育児様式論が展開されている。育児様式の重視は、フロイト心理学の根幹をなす幼児性欲論に基礎をおくものであり、ベネディクトはその著『文化の諸様式』の中でもアメリカ・インディアンの集団的性向の違いを育児様式等の集団的文化装置の影響によって部族間に存在する集団的な性向の違いが生じていると論じていた。

3．日本における『菊と刀』批判

『菊と刀』刊行直後の1950年に「日本民族学会」（現在の「日本文化人類学会」）は機関誌『民族学研究』14巻4号を「『菊と刀』特集」とし、日本の人文科学研究者による批判的検討を展開している。ここでは法学者川島武宣と心理学者南博の論文によってその一端を見ることにしよう。

川島武宣はベネディクトが一度も日本への渡航機会をえることもない状態で、従来の日本の研究者が認識していなかった諸点を明快に指摘し分析を深めていることを称賛している。その一方で、①変化の過程にある日本社会を非歴史的・固定的に捉える欠点があり、②内的に階層分化している日本社会を均質的な総体として扱っていることは日本社会の分析として問題があるとの指摘を行っ

ている*14。

南博はまずベネディクトが文化人類学研究者として主要な面接調査の対象にした在米日系人の属性に問題があるとし、分析の限界を指摘している。それによれば日系人たちの多くは明治時代に日本に生まれ、その後日本に帰国することもなく、又アメリカ社会にとけ込むこともないまま「純粋培養」の状態であったと指摘している。そうした面接対象者から得られた情報からは昭和の時代の日本社会・文化を正確に分析することは不可能であるとしている。また「歴史的な見方の不徹底さ」があるとして、「総計的日本人」に関する「文化の型」の分析は日本社会の変化を正しく把握できていないとする批判を行っている*15。

いずれも「歴史的分析の欠落」と「内的分化の分析の欠落」を指摘しているが、これはいずれもアメリカの文化人類学ないし「文化とパーソナリティ論」研究者集団が他の人文社会科学研究者に対する対抗関係の中で差異化し、その存在理由としてきた研究方法の特徴点そのものであったということができる。

V　考　　察

第3章において角田柳作の尽力によって戦前・戦後の期間を通じてコロンビア大学に形成された日本文化研究の伝統を確認した。第4章では同じコロンビア大学において形成された文化人類学、とりわけ「文化とパーソナリティ論」・「国民性研究」の研究活動の一角から日本文化研究の主要な源流の一つと見なされているベネディクトの『菊と刀』が生み出されたことを確認した。

現在の日本文化研究に大きな影響力を及ぼし続けている上記2つの伝統が、ほぼ同じ時期のニューヨーク市のコロンビア大学構内という限られた時空間を起点に形成発展したという事実があるとするなら、両者の相互関係がどのようなものであったのかという点は学術的な検討課題になってしかるべきである。しかし探求の現段階において両者が相互に情報や人的な交流をしたという事実は確認できていない。両者が相互に対立したという事実も未確認である。

上記のような現状にある中で、本論の小結としてとして「なぜ2つの潮流が相互不干渉のままであったのか。またその学説史的含意は何であったのか。」に関する若干の考察を提示しておこう。

2つの潮流の最大の差異は、研究対象文化の言語の習得と文献研究へのこだわりの違いにあると思われる。コロンビア大学日本文化研究所、日本文献コレクションに結集した研究者集団はいずれもまず日本語の読解力の習得に努め、それにより日本語文献資料を読み込むことを通じて研究を進めようとしていた。更に言えば、一定の歴史的深度をもった資料の渉猟と分析を心がけていたという共通の特徴を持っていた。角田柳作はそうした研究者集団に対し献身的な支援を行い、「触媒的役割」を果たした。

それに対して文化人類学研究者の志向性は時間軸的には「民族誌的現在」つまり調査時点の「現在」にこだわる傾向がある。通常の人類学的調査においても、現地語の習得と現地における長期滞在は必須とされ、現地社会の歴史地理に関する基礎的資料等の収集分析は調査準備における必要条件とされている。しかし『菊と刀』を生み出した日米戦争渦中の「国民性研究」における「遠距離文化の調査」においてはこれらの重要な要件を欠落させた形で調査研究を行わざるをえなかった。まず対象社会の現地語習得は必要とされず、通訳・翻訳者を介した資料分析と面接調査が遂行された。また調査対象地域での長期滞在も捨象された。また文献資料の収集は行われたが歴史的深度を持った分析は回避された。現地資料についても英語化された史資料に力点が置かれ、現地語文献についても調査助手による翻訳の活用が可とされた。しかし文化人類学者ベネディクトは日系人との面接調査には拘りをもって研究を進めている。

戦時情報局時代のベネディクトの研究スタイルについてミードは下記のように述べている。

「戦時情報局時代の彼女は、この新しい遠距離文化の人類学的研究に関して独自の方法論的スタイルをつくりあげ、高度の文字文化を理解するため刊行資料とインタビュー資料をたくみに統合させた。……そして断片的なデータから全体像を構成することを得意とする彼女の性向が、これらの多種多様な、かたよった素資料を、有意義に関連づけつつ整理していく上で新たな力を発揮したのだった。」*16

このようにベネディクトの日本文化研究においても重視されたのは在米日系人への面接調査であり、文献資料等は補助的な位置づけであった。「遠距離文化の調査」とはいえ文献資料の比重が大きくなることはなく、調査の眼目は生身の人間に対する面接調査であった。

またコロンビア大学のベネディクトと文献派日本研究者との関係については、「すれ違い」を生じさせる各種の事情があった。まずベネディクトの戦時下の調査研究はワシントン市の戦時情報局を中心になされたという事情があった。日本語文献や日本に関する映像資料については軍部が十分な量を収集しており、コロンビア大学の日本語コレクションに頼る必要がなかった。また日本語文献の翻訳や面接調査における通訳も戦時情報局から提供されていた。更に戦後になり戦時報告書を『菊と刀』の形にまとめ上げる作業に関しては相当量の文献の追加的収集や日本語通訳・日本研究者の協力が必要になったと思われるが、ベネディクトはその作業を全てカリフォルニア州において行っており、コロンビア大学の図書館や関係者への協力依頼等の形跡は見られない。ベネディクトがコロンビア大学人類学部教員として復帰したのは『菊と刀』執筆の後のことであった。

『菊と刀』は出版後国内外で高い評価を受けているが、コロンビア大復帰後、1948 年逝去迄の 2 年余りの期間は人類学部教授昇任、後進の指導、ヨーロッパ人の国民性研究プロジェクトの編成、アメリカ人類学会会長就任等で多忙を極めていたと推測される。

『菊と刀』が与えた影響とその継承について文化人類学の研究方法に引きつけて考えるなら、「遠距離文化の調査」の方法がベネディクトの業績に見られるような研究成果をあげたことに着目して現在の文化人類学調査法の改善に活用することが考えられる。SNS や対話型ソフトの利便性が増している現在、予備調査や本調査ないし追加調査の一部をリモートのインタビューで行うことの意味は増していると思われる。特に 2020 年以来のコロナ禍のようなパンデミック状況や戦乱の渦中にある調査地に関する調査において活用していくことには大きな意味があると思われる。そうした観点から 1940 年代の「国民性」研究集団が構想し、調査研究で行った作業に新たな光を当てる意味があると思われる。

更にアメリカ文化人類学の学説史的な観点から、「文化相対主義」を志向した研究の成果としてのベネディクトの『菊と刀』の評価を現代的な研究視角から再評価する必要もあると思われる。アメリカ以上に日本の読者層から大きな反響を呼び、現在でも「日本研究の最重要の古典」と見なされている『菊と刀』であるが、ベネディクトの「あとがき」や出版後のコメントで明らかなように、この書はアメリカ人読者を主な対象として英文で書かれた作品であった。ベネディクトは「自民族中心主義」の思考の枠にとらわれているアメリカ国民に対して『菊と刀』によって「他文化のパターン」を認識させることを迫っている。アメリカ文化の文化パターンを日本文化パターンと対比させることを通じてパターンの多様性を意識化させ「他文化の容認」、「文化相対主義」の視点を獲得することを求めている。WASP 中心の主流文化の坩堝で新移民集団に同化を迫るアメリカ社会の文化装置を解体し、多様性や他者の権利を容

認することを目指す文化運動の一環としての作品であったということができる。

そうした多元主義をめざす運動自体が 1980 年代以後の思想運動の中で解体されてきている。「文化相対主義」の主張自体が「本質主義」であり、安定的体系を志向し、境界を確定するものとして排撃されてきている。更に文化人類学の軍学共同研究への先鞭をつけたアメリカ文化人類学の「文化とパーソナリティ研究」「国民性研究」は二重のスティグマを負わされてきている。その中で文化人類学のアカデミックな世界においては『菊と刀』は忘却の彼方に追いやられている感がある。

しかし思想史的変化のうねりが曲折点に差し掛かった現在、いま一度『菊と刀』成立の過程を検証し、そこから次の段階において有効な要素を見出していくことも今後の課題であると思われる。既にそうした新たな意味づけを付した『菊と刀』再検証への提案もなされている[*17]。

注

1. 新渡戸稲造（1994）
2. 岡倉天心（1995）
3. この節に関わる情報は柳井久雄（1994）、荻野富士夫（2011）、群馬県立土屋文明記念文学館（2016）等を参照している。また講演会配布資料、長谷川福次「角田柳作先生の弟子たち」（2016.5.8　渋川市）に多くを負っている。
4. コロンビア大学退職後も非常勤講師等の形で日本研究教育に関与している。
5. 角田は 1941 年 12 月日米開戦直後日本側スパイの嫌疑をかけられ留置されたが、コロンビア大学側の支援活動も奏功し 2 か月で釈放されている。戦時中も教壇に立ち続けている。
6. エンブリーが熊本調査に関連して日本の研究者との情報交換等を行ったことに関しては桑山敬己（2016）に詳述されている。
7. これらの点については小野澤正喜（2021）で論じられている。
8. F. ボアズに関しては益子待也（1985）を参照。
9. 箕浦康子（1984）を参照。
10. ゴーラー，J.（2011）でゴーラーとベネディクトの研究交流、ゴーラーの日本文化研究について詳述されている。
11. Connor,J.W.（1977）等を参照。
12. こうした調査対象の偏りについては南博（1950）において論じられている。
13. 池上彰、佐藤優（2021）53–54 頁。そうしたバイアスをもった日本社会に関する情報が連邦政府や軍部に採用されたことによって戦後の日本で GHQ（連合軍司令部）によって推進された占領政策では農地改革等の封建遺制解消の取組が中心課題になったと佐藤優は述べている。（池上彰、佐藤優（2021）58 頁）
14. 川島武宣（1950）を参照。
15. 南博（1950）を参照。
16. ミード，M.（1977）97 頁
17. 例えば太田好信（2016）では先住民運動の台頭に関連づけて『菊と刀』の対話構図を再検証する提起がなされている。また慶田勝彦（2005）は調査者がえる断片的な経験に統合性を与えるために『菊と刀』の方法を援用しようとの提案を行っている。

参考文献

綾部恒雄（1985）「ベネディクト―文化の相対主義」，綾部恒雄編『文化人類学群像Ⅰ』アカデミア出版会 278–296

――――（1994）「ベネディクト『菊と刀』」，綾部恒雄編『文化人類学の名著 50』平凡社　162–172

ベネディクト，B.（1967）長谷川松治訳『菊と刀』社会思想社

Connor, J.W.(1977) Tradition and Change in Three Generations of Japanese Americans, NY: Burmham

Embree, J.(1946) A Japanese Village: Suye Mura, London: Routledge

群馬県立土屋文明記念文学館（2016）『角田柳作とドナルド・キーン』土屋文明記念文学館

ゴーラー，J.（2011）（福井七子訳）『日本人の性格構造とプロパガンダ』ミネルヴァ書房

池上　彰，佐藤　優（2021）『真説 日本左翼史』講談社

川島武宣（1950）「ルース・ベネディクト『菊と刀』の與えるもの―評価と批判」，『民族学研究』14 巻 4 号　263–270

キーン，D.（1975）『日本との出会い』中央公論社

――――（2011）『ドナルド・キーン自伝』中央公論社

慶田勝彦（2005）「未完のフィールドワーク―ベネディクトと『菊と刀』」，太田好信，浜本満編『メイキング文化人類学』世界思想社　137–160

桑山敬己（2016）「エンブリー『須恵村』の Re-View（再

見／再考)」，桑山敬己編『日本はどのように語られたか』昭和堂　57–83
益子待也（1985）「ボアズ―近代アメリカ人類学の父」，綾部恒雄編『文化人類学群像Ⅰ』アカデミア出版会　83–99
ミード，M.（1977）『人類学者ルース・ベネディクト　その肖像と作品』社会思想社
南　　博（1950）「ルース・ベネディクト『菊と刀』の與えるもの―社会心理学の立場から」，『民族学研究』14 巻 4 号　271–274
箕浦康子（1984）「文化とパーソナリティ論（心理人類学)」，綾部恒雄編『文化人類学 15 の理論』中央公論社　95–114
新渡戸稲造（1994）『武士道』岩波書店
沼崎一郎（2006）「文化相対主義」，綾部恒雄編『文化人類学 20 の理論』弘文堂　55–72
――――（2020）「ルース・フルトン・ベネディクト」，岸上伸啓『はじめて学ぶ文化人類学』ミネルヴァ書房　40–45
荻野富士夫（2011）『太平洋の架橋者 角田柳作―「日本学」の SENSEI』芙蓉書房出版
太田和子（1985）「ミード―偉大なる啓蒙主義者」，綾部恒雄編『文化人類学群像Ⅰ』アカデミア出版会　331–348
太田好信（2016）「文化人類学と『菊と刀』のアフターライフ」，桑山敬己編『日本はどのように語られたか』昭和堂　31–56
岡倉天心（1995）『茶の本』岩波書店
小野澤正喜（2021），「文化人類学における国民性研究・地域研究の展開―R.Benedict，J.Embree の継承関係を中心に」，『育英短期大学研究紀要』第 38 号　73–78
柳井久雄（1994）『角田柳作先生―アメリカに日本学を育てた上州人』上毛新聞社

（2022 年 1 月 26 日受理）